

「神様の熱い思いは人の思いを遙かに超える」

「多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、方々の町から徒歩で駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」（聖書協会共同訳 マルコ6:33-34）

「5千人の給食」の話は、5つのパンと2匹の魚が祝福されてみんなが満腹したという有名な話ですね。

私は、奇跡が起きるまでの経過に心を向けてみました。イエス様の弟子たちは食事をする暇がないほどに忙しい日々を送っていました。そんな弟子たちを見かねた主は「さあ、あなたがただで人里離れた所へ行って、しばらく休むが良い」（マルコ6:31）と言って休息を取るように命じます。「人里離れた所」ってどんな場所でしょうか。聖書協会訳では「寂しい所」と訳されています。

文字通りに想像するならば日常を離れて誰も人のいないところに行って休みなさいということを弟子たちに勧めたのでしょうか。

しかし、その動きに気づいた人々は先回りして弟子たちの向かった場所にすでに集まっていました。ですからそこは「寂しい場所」ではなく、「賑やかな場所」になっていたのです。

コロナ禍になって、人が大勢集まることを控えるようになりましたが、以前は人が大勢集まる時の熱量はすごいものがありました。時間もお金もかけて私たちは「そこに行きたい」と思う思いを持って集まっています。

大勢の群衆のイエス様に会いたいという熱い思いは、「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れまれた」（マルコ6:34）という主の思いから察することができます。

弟子たちは休むどころかかえってその熱量の渦中にいることになります。さらに、休みなさいといわれたのにも関わらず、「あなたがたが彼らに食べ物を与えてなさい」と主は弟子たちに言わされているのです。何か矛盾しているとは思いませんか。

5千人の給食の奇跡は、パンと魚が増えたという手品のような目に見える現象に心を奪われてはいけないと思うのです。やはり、この話も「神の国」を念頭に受け止めなければならないと思います。神様の思いは「神の国」の完成です。いわば飼い主のいない羊が1匹もいなくなる状態の完成のために

神様の宣教の業は止まることはないのです。その宣教の業に招かれている弟子たちであり、私たちです。そのためにイエス様は弟子たちに休息をとるように勧めたのです。

すべての人が満腹したとありますが、これは「癒やされた」という意味があります。「治る」と「癒やされる」は違います。

「治る」はまた病気になる可能性があるということです。「癒やされる」はその事実を乗り越える力を与えられるということだと思います。たとえ病気や現実は変わらなくても、生き方が変わるということが起きるということです。イエス様に癒やされた人々は、皆その後の生き方が変わりました。癒やされると納得するということかもしれません。現実は変わらないかも知れないけれど、私の人生に主は必ず一緒にいてくださると納得して新たに生きることです。「満腹した」とはそういうことなのかもしれません。

12の籠がいっぱいになるとは、神様の思い（一人一人を思う思い）がそこに豊かな完全に示されたということだと思います。

私たちをはるかに超える熱き思いを持って私たちを救おうとされている主の姿をいつも心に留めたいと思います。

（司祭 ステパノ 越山哲也）